

むさしの TALK

青春時代も撮影の仕事でも 自然となじんできたまち

犬童一心さん(映画監督)

仕事でもプライベートでも、吉祥寺はなじみ深いまちだと語る犬童さん。
作家の見た吉祥寺を映像で表現する喜びを語ってくださいました。



犬童一心(いぬどういっしん)
1960年生まれ。東京都出身。
CMディレクターとして数多くの
広告賞を受賞する一方で、映画監督としても活躍。
『ジョゼと虎と魚たち』(03)、
『メゾン・ド・ヒミコ』(05)、
など各種映画賞受賞作品や、
『グーグーだって猫である』
(08)など話題作も多数。

吉祥寺との関わりは、もう50年にもなります。吉祥寺東町の法政中学校(現在は三鷹市に移転)に、成城の自宅から自転車を通っていましたから。今のように吉祥寺が脚光を浴びていない頃で、もっと人が少なかったですね。映画が好きだったので映画館によく行き、古本屋で映画雑誌を探しました。今はずいぶんお店も変わったけれど、昔通った古本屋はまだ残っていて懐かしいです。映画などの制作をするようになってからも、吉祥寺でよく撮っています。僕はずっと吉祥寺在住の漫画家・大島弓子さんの大ファンで、大学時代からその作品を映画化してきました。大島さんの作品は、ほとんど吉祥寺が舞台。吉祥寺というまちを宇宙的に捉えているところが魅力です。その視点で吉祥寺を見ると、確かにまちの姿が違って見えてくる。撮影では、まち全体を舞台セットのように見ているのですが、撮影が終わればまたパツと普段のまちに戻って見える。その瞬間がすごく気持ち

● PRESENT

今回取材した、犬童一心さんのサイン色紙を抽選で5名の方にプレゼント!詳しくは本誌折り込みハガキをご覧ください。



がいいんです。
2年ほど前、大島さん原作のドラマ撮影を機に、井の頭公園に面した大島さんが住んでいたマンションに引っ越して最近まで住んでいました。初めは仕事部屋のつもりでしたが、居心地が良くて。当時は、森が残る井の頭公園を散歩して、よく象のはな子にも会いに行きました。昨年亡くなったけれど、先日も自然と象舎に足が向いて、空になった象舎を見て、「ああ、いないんだ」と実感しました。はな子は僕の精神的支柱だったのだと思いましたね。
今でも吉祥寺にはよく行きます。どこが好きと言えないくらい好き。"なじんでいる"という言葉がぴったりのまちなんです。

